潮田地区

鶴見区

下町的風土が醸しだす、街のやさしさ 世代・国籍・文化の異なる多様な住民層を包容

〝職工さんのまち〟として発展

鶴見区潮田地区は、まさに近・現代の日本の工業化や経済発展と軌を一に変貌をとげてきたエリアである。

東京湾に面した静かな田園地帯であり、潮干狩りや海水浴の行楽地として名を馳せていた潮田一帯が大きく変わったのは、大正時代。〝京浜埋め立ての祖〟といわれる浅野総一郎が大正2年に鶴見埋立組合を組織し、海岸の埋め立てに着手したことがきっかけだった。この埋め立て地には日本の重化学工業をリードする大資本工場が進出。かつて半農半漁を営んだ地域は工業を軸に急速に発展した。

大正5年から埋め立て地に旭硝子や浅野造船、日本鋼管製鉄所、芝浦製作所（現・東芝）などが工場を設けた。それに伴って、就労者のための百軒長屋など社宅・給与住宅の整備が進み、潮田は〝職工さんのまち〟としての性格を強めた。臨海部工場地帯と鶴見駅を結ぶ通りに位置する本町通商店街には「××工場御用達」と書かれた看板やのぼりが掲げられ、職工さんの給料日には市が立ったという。

第2次世界大戦で臨海部の工場地帯と地区の約半分が壊滅状態となったものの、戦災復興を経て、高度成長期には再び京浜工業地帯で働く人々とその家族が暮らす職住近接型の街として復活した。なお、現在の同地区は、戦災復興時の区画整理事業による整然とした街並みのエリアと、空襲をまぬがれ戦前の面影を残す住宅密集エリアで形成されている。

薄れつつある京浜工業地帯との関係

臨海部の工業地帯と密接な関係のもとで発展してきた潮田地区だが、近年、京浜工業地帯とその就労者の受け皿という関係は薄れつつある。

京浜工業地帯の就業者数は、国内製造業の空洞化や産業構造の転換を背景に80年代以降低下しており、地区住民の就労地を見ると、鶴見区内で働く人は54・17%。その多くが京浜工業地帯に勤めて

Area Data

●潮田地区

地勢　鶴見区の南東部、川崎市との市境に位置する。鶴見川河口部の田園地帯および新田開発や埋立事業で形成された地域で、地区全体が起伏のない平坦地。沿岸部は京浜工業地帯。JRや京急の鉄道駅から近く、バス交通網も充実し、交通面では便利な環境にある。

歴史　江戸時代は半農半漁の地域だった。大正期以降に臨海部が埋め立てられ、大規模工場が進出した。それに伴い、工場就労者の人口流入、急速な市街地化が進んだ。第二次世界大戦では大きな被害を受けたが、戦後、戦災復興土地区画整理事業が施行され、臨海部の工業地帯の復興・発展ともに、再び高密度住宅地が形成された。

いると推測されるが、かつてと比べれば臨海部の工場で働く人は確実に減り、京浜臨海部で働いていた地域住民の二世、三世は区外で働くことも多い。

また、工場が撤退し、工場跡地にマンションなど大規模集合住宅が建つケースも増えてきた。潮田地区には交通面での利便性や住居費や物価の安さといった経済的メリットがあり、都心回帰型の若年ファミリー層や単身高齢者の流入を促進させている。

そのため、現在の住民層はおおまかに3つに分けられる。半農半漁の時代から住む住民層、大正時代以降に臨海部の工業地帯の就労者として移住してきた住民層、そして近年移り住んできた住民層である。しかし、これらの住民間に対立があるわけではない。地元の人は「人なつっこい街だよ」と評すが、下町的な風通しの良い人間関係や相互扶助的精神が根づき、新たに移り住んできた人にとっても溶け込みやすいまちである。

密集市街地のエスニックコミュニティ

コミュニティの柔軟さは、潮田地区が国際色豊かなエリアであることにもあらわれている。

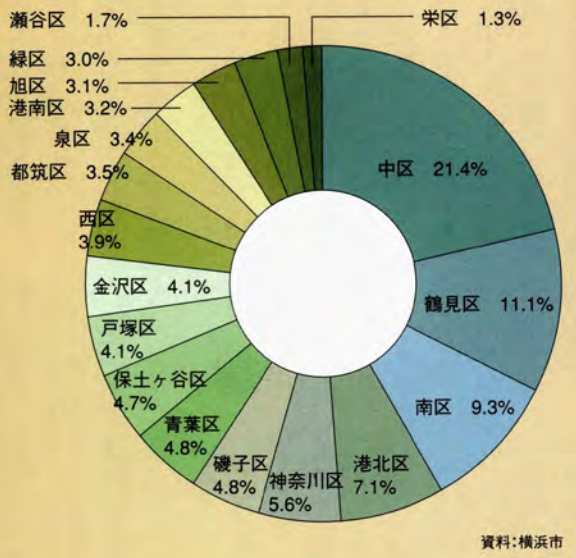
「鶴見区民の40人に1人が外国人です。私たちは、外国の人たちに『日本に来てよかったな。鶴見に住んで良かったな』と思ってほしいと、心から願うボランティアの集まりです」。

これは在住外国人のための日本語教室を開いているボランティア団体「こんにちは」（国際交流の会）の活動紹介文の一節だが、潮田地区には数多くの外国人が住む。戦前からの在日韓国・朝鮮人はもとより、中南米系外国人も多い。平成13年10月現在、横浜市在住の中南米系外国人のうち、約3分の1の2201人が鶴見区に住み、その大半が潮田地区周辺に居住しているといわれている。

その背景には、働く場所の多さや物価や家賃の安さに加え、中南米の日系人と血縁関係を持つ沖縄県出身者のコミュニティがあることが大きい。過去、沖縄からは多くの人々が臨海部工業地帯の就労者として移り住んできた。

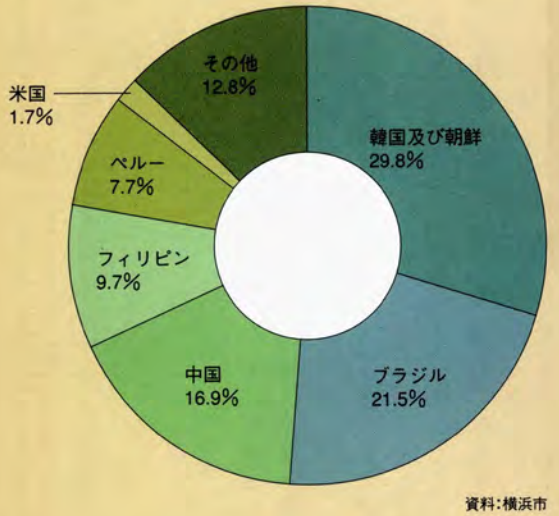
現在、横浜市鶴見沖縄県人会の会員数は2万4670人、その家族を含めると区内には3万5～6千人の沖縄県出身者が暮らしているのではないかという。なかでも、その半数以上が住む潮田地区には、沖縄料理店や沖縄の食材を扱う商店や軒先にシーサーを置く家が点在し、出

●横浜市の外国人登録者数の区別構成比



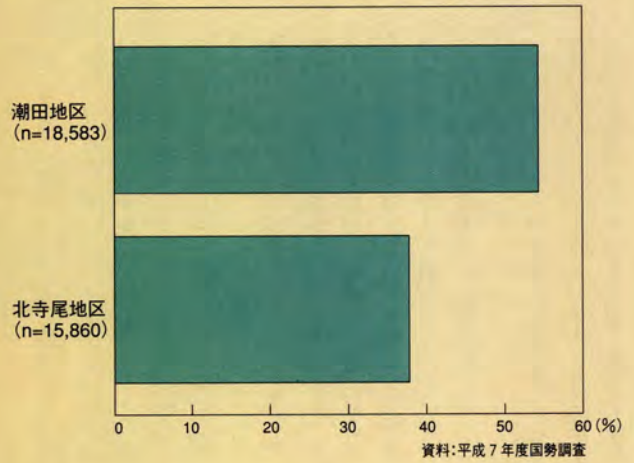
資料：横浜市

●鶴見区の外国人登録者の国別構成比



資料：横浜市

●潮田地区就労者の鶴見区内就労率（同区内北寺尾地区との比較）



資料：平成7年度国勢調査

身者による文化継承も盛んである。このようななか、沖縄から中南米に移り住んだ日系人の労働者とその家族が、身寄りの多い潮田地区に集まるようになったという。

同時に、地区特有の下町的なフランクさが外国人にとっての居心地の良さを生み出しているのだろう。住民の間では日本語教室「こんにちは」をはじめ、外国人との交流や外国人に対するボランティア活動も盛んだ。学校関係では、IAPE（外国人児童生徒保護者交流会）が設立され、ボランティアや教職員、南米出身の保護者などが教育問題や地域交流に取り組んでいる。また、毎週土曜日、潮田小学校と潮田中学校を拠点に、外国人の子どもたちが母国語を忘れないように国語教室を開いている。

このような活動は、外国人と地域住民が接する中、草の根的に発生してきた。工業化によってさまざまな地域から人々が移り住み、都市化してきた潮田地区は多様な文化を受け入れる柔軟性やニューカマーへのもてなし精神に富んでいる。ふだんの生活の中であたりまえのように外国語を耳にし、街を歩けば、多くの国際色豊かなレストランや商店に出会う。個々の文化がそれぞれ特色を放ちながら、街に自然に溶け込んでいるのは、潮田地区ならではの包容力の大きさを物語っている。

下町的助け合い感覚で活発化する、高齢者への生活支援

潮田地区の特徴は、地域が育んできた下町気質。すなわち、「祭り好き」「おせっかい」「親切」「気風のよさ」「人情深い」。そんな下町気質をベースに地域には相互扶助精神が深く根づいている。高齢者に対するコミュニティ活動も活発だ。

現在、同地区の65歳以上人口の割合は16・08%で、市や区の平均を上回り、なかでも一人暮らしの高齢者数が他地区に比べて多い。また、子どもと同居している場合でも、60代が80代を介護するという老老介護の問題が生じている。

このようななか、ボランティアグループ「おりづるの家」では、毎週金曜日、痴呆性高齢者を対象にミニデイサービスを行っている。場所は元民生委員の自宅の茶の間。ここの家ではミニデイサービス以外にも、他の曜日に地域の一人暮らし高齢者を招き、夕食会なども行っている。

このような潮田地区のボランティア活動の拠点が「潮田地域ケアプラザ」。平成6年に開館した同施設は区内初の地域ケアプラザだが、要介護高齢者に対する施設サービスを実施しているほか、ボランティアの活動拠点としての役割を担っている。

というのも、施設サービスだけでは、高齢者の生活全般をケアしきれない。負担の多い介護者や、多少の生活支援があれば自立した生活を送ることのできる高齢者のためのサポート体制も不可欠との認識から、同施設開設を機に多くのボランティアグループが誕生した。

●ボランティアグループ「鶴の恩返し」の活動

たとえば、配食サービスを展開する「ランチさるびあ」や「キッチン403」が週4日、同プラザを拠点に活動。また、「鶴の恩返し」は、リタイアした男性約60名で組織されたボランティアグループで、『ボランティアのコンビニ』を標語としており、病院などへの外出支援や「ランチさるびあ」がつくる弁当の配達、「おたすけまん」と名づけた買い物代行、建具の修理、庭の草取り、安否確認サービスなど幅広い活動を展開。常にメンバーの誰かしらがケアプラザに出入りし、依頼があれば気軽に応じる体制を心がけている。

住民ボランティア活動が活発なことや、地域ケアプラザや地区センターなど生活支援施設が整備されていること、銭湯や弁当屋など商店が揃っていることなどから、潮田地区は一人暮らしの高齢者にとって住みやすく、地区内に移り住んでくる単身高齢者も多い。

「潮田は下町・職人気質のまち。なぜそこまで我慢するのかと思うほど、昔かたぎの我慢強い高齢者が多い。また、自分たちの高齢期はできるだけ子どもに頼らず、地域の支えあいの中で自立して生活してきたいと考えている人も多い」とはケアプラザのスタッフの言で、その希望に応えたいと下町的扶助精神から始まった住民のボランティア活動は、きわめて自然に行われている。

潮田地区は相互扶助の努力によって、高齢者が住みなれた環境で安心して生き生きと住み続けられるまちになっている。